

平城京出土の飛鳥寺軒丸瓦と「竹状模骨痕」をもつ丸瓦

原田憲二郎

I. はじめに

平城京内で飛鳥・白鳳時代の寺院の軒瓦が出土することがある。そのことについては大きく分けて二通りの考え方ができる。一つは、平城京遷都以前に寺院がその地に造営されていたという考え方(海竜王寺など)、もう一つは、平城京遷都に伴って、平城京に飛鳥・藤原の地から移建され、その時に瓦も一緒に運ばれてきたという考え方(元興寺、大安寺など)である。

奈良市教育委員会が平成五年度に行なった平城京右京三条一坊十四坪の発掘調査¹⁾では、これまでに飛鳥寺などで同範品が確認されている白鳳時代の軒丸瓦が出土した。本稿では、その資料を紹介するとともに、平城京内で出土した経緯について若干の考察を試みたい。

II. 右京三条一坊十四坪の調査と出土瓦

奈良時代以前の軒丸瓦が出土した場所は、奈良市三条大路五丁目1-29番地で、平城京の条坊復元によると、右京三条一坊十四坪の西辺にあたり、間近に西一坊大路が想定される(図1)。検出した主な遺構には、弥生時代の溝1条、奈良時代の掘立柱塼2条、鎌倉時代の井戸1基がある。主題となる軒丸瓦(図2-1)は鎌倉時代の井戸の枠内から出土した。他に井戸の枠内からは三重弧文軒平瓦(図2-2)、「竹状模骨痕」をもつ行基葺式丸瓦(図2-3~6)、縦位縄叩き桶巻き作り平瓦、瓦器碗などが出土している。これらの瓦は、土器の年代から十三世紀後半代に井戸に一括投棄されたもののようである。なお、調査地周辺に平城京遷都以前の寺院があったことは、文献からは見い出せない。

出土した軒丸瓦は、飛鳥寺XⅦ型式²⁾と同範である。複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、外区外縁は素文、外区内縁は珠文で、部分的に珠文間にひとまわり小さい小珠文を配する点が特徴である。内外区を分かつ圏線および外区の内外区を分かつ圏線は無い。蓮弁は比較的長く平板であるが、弁端は高く反り上がり、子葉もわずかではあるが盛り上がる。間弁は楔状を呈し、高く盛り上がる。中房はわずかに突出する。蓮子は1+8である。同範品は飛鳥寺で2点³⁾、姫寺廃寺で1点⁴⁾、奥山廃寺(奥山久米寺)で1点⁵⁾、飛鳥池遺跡で4点⁶⁾、藤原京横大路で

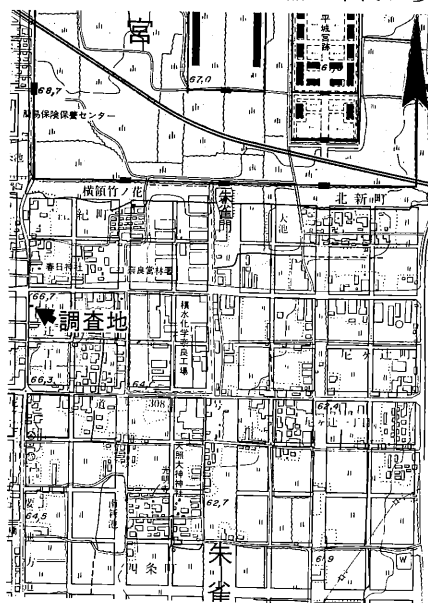


図1 平城京右京三条一坊十四坪調査位置図 (1/20,000)

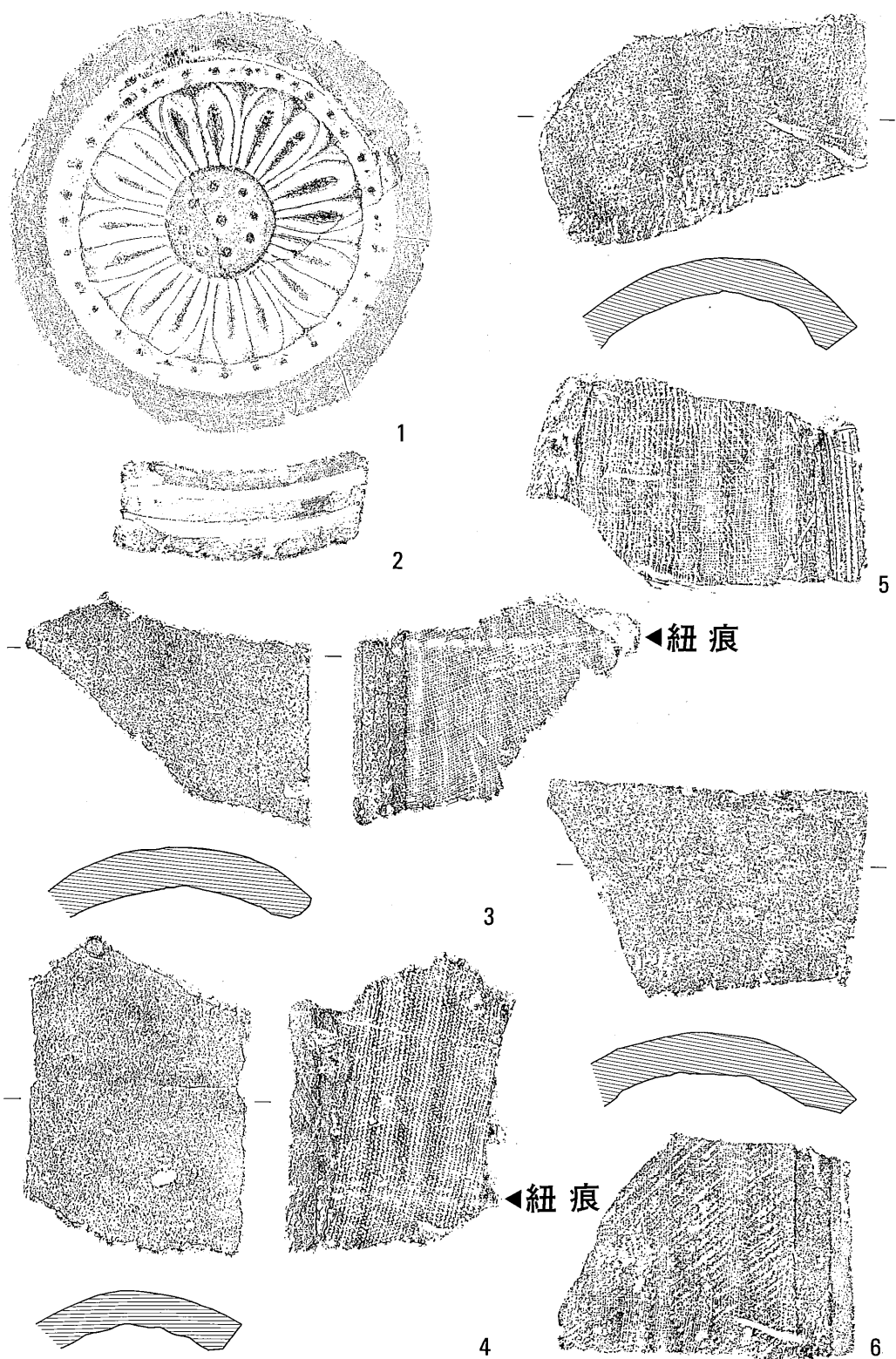


図2 平城京右京三条一坊十四坪調査地出土瓦類 (1/3)

1点⁷⁾、飛鳥寺の東南地域(飛鳥寺1992-1次調査地)で9点⁸⁾確認されており、桜井市高田廃寺にも同範品と思われる採集品が1点⁹⁾ある。飛鳥寺XⅦ型式の年代は、かつて平安時代の初め頃に推定されていた¹⁰⁾が、飛鳥池遺跡の調査で、「竹状模骨痕」をもつ行基葺式丸瓦を丸瓦部にすることや三重弧文軒平瓦と組み合わせることが判明したことから、現在では白鳳時代末頃と考えられている¹¹⁾。大脇潔氏はこの軒丸瓦について、「蓮弁に川原寺系の複弁軒丸瓦から展開するものとはやや異質な表現が看取され、半島系の複弁軒丸瓦との関係を追求すべきものではないか」¹²⁾と考えている。

「竹状模骨痕」をもつ丸瓦は、「竹のような材料を割って紐で編み重ねて簾状のものを作り¹³⁾」これをまるめて模骨とした丸瓦である。出土した「竹状模骨痕」をもつ行基葺式丸瓦は9点ある。うち2点(図2-3、4)に模骨を横に綴じ合わせた紐の圧痕がある。凸面の調整は縦位に縄叩きののち、ナデ調整を行なう。大和では、姫寺廃寺¹⁴⁾、奥山廃寺¹⁵⁾、飛鳥池遺跡¹⁶⁾、飛鳥寺の東南地域¹⁷⁾、坂田寺¹⁸⁾、で出土例がある。

では次に、「なぜこのような瓦が平城京内のこの地で出土したか」ということについて考えてみたい。

前述したように、文献から右京三条一坊十四坪の調査地付近に平城京遷都以前の寺院跡が見受けられないことからすると、同範品が確認されている遺跡から平城京内に持ち運ばれたと考える方が妥当だと思われる。特に同範品が確認されている遺跡の中で、注目されるのは、飛鳥寺の東南地域である。というのは、調査地では、飛鳥寺XⅦ型式と「竹状模骨痕」をもつ行基葺式丸瓦が多く出土しており、さらに三重弧文軒平瓦¹⁹⁾、縦位縄叩き桶巻き作り平瓦も出土しており、その出土瓦類の様相が一致するからである。また、次章でふれるが、文献に記された記事にも注目すべきものがあるからである。この調査地では飛鳥寺XⅦ型式の他に、「竹状模骨痕」を丸瓦部とする軒丸瓦、飛鳥寺XⅩ型式が出土している²⁰⁾。遺構としては七世紀後半に建てられた礎石建ち基壇建物を検出しており、七世紀後半に道昭(あるいは道照)が唐から将来した経典を納めるために建てられた禅院跡の可能性が高いと考えられている²¹⁾。次章では、その禅院について、これまでの研究をふまえて文献からみてみたい。

Ⅲ. 記録からみた飛鳥寺禅院と平城京禅院寺

『続日本紀』の文武天皇四年(700)三月十日条の道昭遷化の記事に、道昭が白雉四年(653)に「使に随ひて入唐し、適々玄奘三蔵に遇ひて、師として業を受く。」と、渡唐して玄奘三蔵に師事したことを記し、帰朝後「元興寺の東南隅に於て別に禅院を建てて住す。時に天下行業の徒、和尚に従ひて禅を学べり。」とある。『日本国現報善惡靈異記』巻上の第二十二にも「故の道昭法師は、船の氏、河内の国の人なり。勅を奉りて佛法を大唐に求め、玄奘三蔵に遇ひて弟子と為る。(中略)業成りし後、此の土に到り、禅院寺を造りて²²⁾止まり住む。」と見える。また『日本三代実録』元慶元年(877)十二月十六日の条には「禅院寺を以て元興寺別院と

為す。禪院寺は、遣唐留学僧道昭此に還りて後、壬戌年三月本元興寺東南隅に創建す。」とある。これらの記事から、白雉四年の入唐留学僧道昭は帰朝後の天智天皇元年(661)に飛鳥寺の東南隅に禪院を建てたことが知られる。上記の記事から、飛鳥寺1992-1次調査地は飛鳥寺の東南に位置し、七世紀後半代の礎石建ち基壇建物を検出していることから、調査地が禪院跡の可能性が高いと考えられているのである。さらに『続日本紀』同日条に、道昭死後「都を平城に遷すや、和尚の弟および弟子ら奏聞して、禪院を新京に徒し建つ。今の平城右京の禪院これなり。此の院に多くの経論あり。書迹楷好にして並びに錯誤あらず。みな和上の将来せる所のものなり。」とあり、また『日本三代実録』同日条にも「和銅四年八月平城京に移建するなり。」とあり、これらの記事から、和銅四年(711)に和尚の弟や弟子たちにより平城京右京に移され、飛鳥寺との関係は中断され、「禪院寺」と称され、単独寺院となつたらしいと考えられている²³⁾。飛鳥寺の平城京移建より七年前のことになる。収蔵された經典については、写経の原本として高く評価されていたことがわかり、堀池春峰氏は「奈良時代を通じて屈指の図書館的存在であつたと思われる。」²⁴⁾と述べている。薬師寺に伝わる仏足石の南面の銘文に「大唐の使人王玄策、中天竺に向い、鹿野園の中の転法輪処にして、因に跡を見て、転写搭するを得たるもの、是れ第一本なり。日本の使人黄文本実、大唐国に向い、普光寺において、転写搭し得たるもの、是れ第二本なり。此の本は右京四条一坊の禪院に在り。禪院の壇に向い、神跡を披見して、敬しく転写搭したるもの、是れ第三本なり。(以下略)」とあり、この銘文から禪院寺は右京四条一坊にあったことがわかる。このことはさきに挙げた『続日本紀』の「今の平城右京の禪院これなり。」と言うところと一致する。また、注目すべきことには禪院寺の寺地が、平城京右京三条一坊十四坪の調査地と近接していることである。

前に挙げた『日本三代実録』の記事から、禪院寺は元慶元年に平城の元興寺の別院となり、両寺の関係は道昭の昔にもどることになったことがわかる。以後の衰亡については文献からはわからない。『今昔物語集』巻第十一の第四に「彼の禪院と云は元興寺の東南に有り。」と、平安時代中期頃にも存在していたような記事があるが、このことについて福山敏男氏は「元興寺の東南とする位置の関係は平城京に移る以前の飛鳥の地におけることであつて、これは『今昔物語集』の作者の単なる知識にすぎず、当時なお存在したことを示す史料とはならない」²⁵⁾と考えている。

IV. まとめ

以上紹介してきた瓦が、平城京右京三条一坊十四坪と飛鳥寺東南地域でともに出土することになった背景には、Ⅲ章に紹介してきた文献の記事から、次のように考えるのが妥当であろう。

飛鳥寺1992-1次調査地は禪院跡であり、その禪院所用の瓦のうちのひとつが飛鳥寺XVII型式で、禪院の平城京移建あたって、右京四条一坊に移建された禪院寺に運ばれ、のちに廃絶した禪院寺から瓦類は近接地の右京三条一坊十四坪の調査地で検出した井戸に廃棄さ

れたと考える。

飛鳥寺XⅦ型式が飛鳥寺では出土するものの、平城京元興寺ではまったく出土していないことは、飛鳥寺XⅦ型式が禪院所用のうちの瓦のひとつであることをうかがわせるものであろう。

禪院寺の廃滅年代の一証左となることとしては右京三条一坊十四坪の調査により、禪院寺の瓦と考えられるものが、十三世紀後半に廃絶した井戸から出土したことから、少なくとも十三世紀後半までに廃滅した可能性が高いだろうと考えられる。

以上、平城京右京三条一坊十四坪の調査地内で出土した瓦について私見を述べてみた。ただし、いまだに平城京禪院寺の遺構そのものは確認されておらず、場所さえ特定されたわけではない。今後、文献から禪院寺があったとされる右京四条一坊内の調査地で飛鳥寺XⅦ型式、飛鳥寺XⅩ型式や「竹状模骨痕」をもつ行基葺式丸瓦が集中的に出土する地域があるであろう。それとともに平城京禪院寺の存在があきらかになることを期待したい。

本稿をまとめるにあたっては、奈良国立文化財研究所 館野和己、花谷 浩、奈良県立橿原考古学研究所 今尾文昭、(財)元興寺文化財研究所 藤澤典彦、奈良市埋蔵文化財調査センター 中井 公各氏に御教示、御助言、御協力いただいた。記して感謝します。

註

- 1) 原田憲二郎、秋山成人、中島和彦「平城京第291次右京三条一坊十四坪の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』奈良市教育委員会 1995
- 2) 坪井清足「第五章遺物 二、瓦類その他」『奈良国立文化財研究所学報第五冊 飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1958
- 3) 坪井清足「第五章遺物 二、瓦類その他」『奈良国立文化財研究所学報第五冊 飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1958 には、調査により出土した1点の他に、1点が採集されていると報告されている。
- 4) 花谷 浩「瓦作りの一工夫—畿内における竹状模骨丸瓦の様相—」奈良国立文化財研究所公開講演会資料 1992
- 5) 「奥山・久米寺の調査(1989-1次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1990の出土瓦一覧表中の「新」が、飛鳥寺XⅦ型式であることを花谷浩氏より御教示をうけた。
- 6) 花谷浩「4、飛鳥池遺跡の調査(飛鳥寺1991-1次調査)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1992
- 7) 今尾文昭氏の御教示による。
- 8) 伊藤武「4、飛鳥寺の調査(1992-1次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1993 なお、出土点数は花谷浩氏の御教示による。
- 9) 保井芳太郎「高田寺」『大和上代寺院志』大和史学会 1932
- 10) 註2) と同じ。
- 11) 註6) と同じ。
- 12) 大脇潔「飛鳥の渡来系氏族と古代寺院」『渡来系氏族と古代寺院』帝塚山考古学研究所 1994
- 13) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その二」『九州考古学研究歴史時代篇』1977
- 14) ~16) 註6) と同じ。
- 17) 註8) と同じ。
- 18) 註4) と同じ。
- 19) 右京三条一坊十四坪の調査地出土の三重弧文軒平瓦は、花谷浩氏、中井公氏立会いのもと、飛鳥寺1992-1次調査地出土の三重弧文軒平瓦と実物照合を行ったが、施文原体が一致しなかった。今後、類例の増加を期待したい。
- 20) 註4) と同じ。
- 21) 「Ⅱ 寺々の調査 飛鳥寺」『飛鳥の一と—最近の調査から—』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1994
- 22) 藤野道生氏は著書「禪院寺考」『史学雑誌第66編第9号』山川出版社 1957のなかで文中に、「禪院寺を造りて」とあるのは「禪院を造りて」の誤りであることを明らかにされている。
- 23) 堀池春峰「平城京禪院寺と奈良時代佛教」『佛教史学第2巻第4号』平楽寺書店 1951
- 24) 註17) と同じ
- 25) 福山敏男「禪院寺」『奈良朝寺院の研究』高桐書院 1948